

## 宮沢賢治の「なめとこ山」



宮沢賢治

今年は、宮沢賢治生誕 110 年にあたります。

その、宮沢賢治 (1896-1933) のことでは、地図を脇に置きながら作品を楽しむ者、作品を手に現地を訪ねる者も多くいます。私たちの身近な発表では、地名とのかかわりで文学的な観点から紹介した、「宮沢賢治・童話の舞台 (金子民雄 『地図の友』昭和 48 年・49 年)」があります。このように、作品に出てくる地名などについては、少々やかましいので、あまりいい加減なことはいえませんが、

といいながらも、地図を楽しむ側からということで、少々のことを書き込むことにしました。

さて、賢治作品の中には、主に岩手県の地名と思われるもの多く出てきます。それは、ア) 実在するものと、イ) 実在しないがモデルがあるもの、ウ) 存在やモデルなどがよく分からないものに三分されます (「賢治地理」)。題名に含まれていて、よく知ら

れた地名の中から代表的なものを拾うと、ア) に当たるものとして「盗森 (ぬすともり)」、イ) は「イギリス海岸」そして、ウ) としては「イーハトヴ」があります。

地図の雑学をする者としては、地名の成り立ちや表記ということから、それぞれに興味深いものです。

「盗森」は、「狼森と策森、盗森 (おいのもりとざるもり、ぬすともり)」という題の話に出てくるもので、それぞれの森は、今では観光地として有名な小岩井牧場の北に実在します。地形図にも表記されているのを見ると分かるのですが、「森」とありますが、これはれっきとした小さな山の名称です。

「山とは、平地より高く隆起したところ」ですが、「古くは『森』とは、木がこんもりと盛り上がったところであった。転じて、人の住まない野でも里でもないところ、開墾の手が入っていないところを『森』と呼び、盛り上がったところ (『山』) と同意語となった」といわれます。

ということで、「〇〇森」といった山名は一見特徴的なように思えますが、ごく当たり前のことなのです。その例が多い東北育ちの賢治には、自然に受け入れられたことでしょう。



イギリス海岸 (降雨の後のため、特徴的な海岸風景が見えないが)

次は「イギリス海岸」のことです。これは同名の作品があって、そこには、同海岸の場所が特定できる以下の記述があります。

「それは、ほんたうは海岸ではなくて、いかにも海岸風をした川の岸です。北上川の西岸でした。東の仙人峠から、遠野を通り土沢を過ぎ、北上山地を横截 (よこぎ) って来る冷たい猿ヶ石川の、北上川への落合から、少し下流の西岸でした。」

賢治は、夏休みに海へ向かうことができなかった農学校の生徒たちと、この地をそう呼び合ったのです。そこには、多少の海への憧れといった意味合いも持っていたにしろ、ドーバー海峡に面した海岸との地質・地層的な類似性を感じ取って命名したようです。農林学校で地質や土壌について学んだ賢治ならではのユニークな命名ですが、残念ながら一般化しなかったのでしょうか、地形図には表記されませんでした。

ところが、当該地点は散策道を含む公園として整備され、観光地図や交通案内標識にもしっかりと表示されています。ですが、地形図には記載されていません。

そして、多くの地名の中で、一番興味を引くのは、最後になった正体不明のものです。賢治が心に描いた理想郷「イーハトヴ」のことは、説明するまでもないでしょう。

ところで、「なめとこ山の熊のことならおもしろい。なめとこ山は大きな山だ」という、特徴的な書き出しで始まる「なめとこ山」は、この分類のどれに位置するのでしょうか (題名は「なめとこ山の熊」)。

当初は、存在やモデルなどがよく分からない、ウ) に属するものと思われていました。

当然のことですが、この手の地名なら、国土地理院の地図には記入されません。

しかし、「ナメトコ山 (地形図は、カタカナ表記となっている)」は、地形図に記載があります。正確には、平成 8 年に申請があって同年 9 月発行の国土地理院 1/25,000 地形図「須賀倉山」に追記されることになったのですが、どのような経緯があったのでしょうか。

平成 8 年は賢治の生誕 100 年に当たったこともあり、作品に出てくる「なめとこ山」をなんとか特定しようという動きが起きました。ある自然保護団体が調べを進めるうちに、当時の花巻市長の吉田功さんが市内の古美術商から求めたという古地図を所有していること、そこには、山の記載があることが分かりました。そして、その団体に所属していた佐藤孝さんらによって所在地を特定させる作業が行われたのです ( )。

その結果、古地図にカタカナ表記された「なめとこ山」は、実在のものとなり、地形図に記入されることになったのです (この春、花巻市博物館でこの地図を閲覧し、現位置と一致していることを確認しました)。

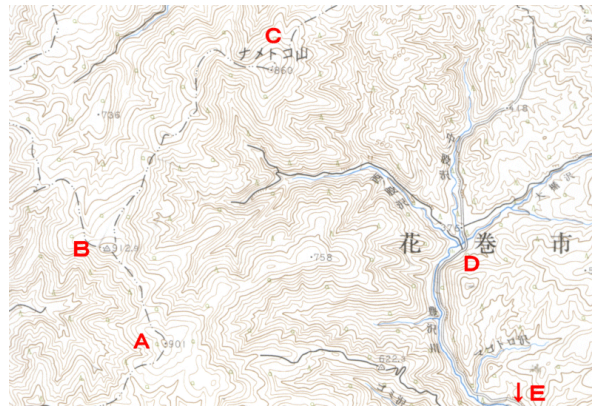


「ナメトコ山」遠景 中央奥

さて、賢治の記述と、古地図にあったという現在の表記位置は一致しているのでしょうか。今更、異議を唱える気持ちはありませんが、賢治の「なめとこ山」を知るために少々振り返ってみましょう。

童話作品の中から「なめとこ山」に関連した主な記述を拾って見ると、以下の7つとなるでしょう。

- ① 「なめとこ山は大きな山だ」
- ② 「淵沢川はなめとこ山から出て来る」
- ③ 「まはりはみんな青黒いなまこや海坊主のやうな山だ」
- ④ 「山のなかごろに大きな洞穴ががらんとあいてある。そこから、淵沢川がいきなり三百尺ぐらゐの滝になってひのきやいたやのしげみの中をごとと落ちて来る」
- ⑤ 「中山街道はこのごろは誰も歩かないから落やいたどりがいっぱい生えたり、牛が遁げて登らないやうに柵をみちなたてたりしてあるけれどもそこをがさがき三里ばかり行くと向ふの方で風が山の頂を通ってあるやうな音がする。気をつけてそちを見と何だかわけのわからない白い細長いものが山をうごめて落ちてけむりを立ててゐるのがわかる。それがなめとこ山の大空滝だ」
- ⑥ 「鉛の湯の入り口になめとこ山の熊の胆ありという昔から・・・」
- ⑦ 「・・・たくましい黄いろな犬をつれてなめとこ山からしどけ沢から三つ又からサッカイの山からマミ穴森から白沢からまるで縦横にあるいた」



ナメトコ山 (1/50,000 地形図「鶯宿」)

この作品に含まれている「なめとこ山」以外のいくつかの地名、「中山街道 (中山峠)」「鉛の湯」「大空滝」は実在します。それを含めて、上のキーワードから見てみます。

⑥の「鉛の湯の入り口になめとこ山の熊の胆ありという昔から・・・」とありますから、地形図にも表記のある「鉛」集落の上手がこの童話の舞台であること、その地域 (豊沢川流域) に「なめとこ山」が存在することになります。

①「なめとこ山は大きな山だ」とありますが、この周囲の山は地形図で見る限りにおいて、概ね 800m から 900m 程度の標高を持ち、山体からみても際立って「これは大きな山だ」と特徴付ける

ものはありません。このことだけでは、どの山も「なめとこ山」になり得ます。

現在は、ダム湖である豊沢湖以降には人家は無く、豊沢川を取り囲むように鬱蒼とした森が続いています。ダム以前もそれほど多くの住居は無く、どの森も深いものであったと思われる。「大きな山だ」は、「深い山」だということもいえますから、周辺の山の規模とも考え併せて、「なめとこ山」はこの流域一帯の森のこと、あるいは森の奥、最上流の山ともいえそうです。

そして、②「淵沢川はなめとこ山から出て来る」という記述ですが、「鉛」集落の上流にこの名の支流はありません。

以後の記述では、それぞれの支流を異なる沢名で呼んでいることから淵沢川を実在する「豊沢川」の支流の一つであるとするのは適切ではないと思います。淵沢川を「豊沢川」本流とするのが的確だと言えます。ここでは、これ以後豊沢川のことを「淵沢川」と呼ぶことにします。

とすれば、「なめとこ山」は、淵沢川の源流の山ですから、標高 901m の「A」、あるいは 912.9m の三角点のある「B」、もしくは地形図に「ナメトコ山」と記入された 860m の峰「C」ということになりますが、ここで断定することはできません。結論は後にしましょう。

次に、③「まはりはみんな青黒いなまこや海坊主のやうな山だ」ということです。

地形図を見ても突出した峰というよりは、丸みを帯びた山が多く「なまこや海坊主のやうな山だ」は、この辺り山一般に言えます。では、「青黒い・・・」は何を意味しているのでしょうか。「黒い森」ではありませんが、常緑針葉樹に覆われた山だということでしょう。時間的な経過もありますから詳細は分かりません

が、Google-map の衛星写真や国土地理院の空中写真閲覧システムで見る限りにおいて、この一帯だけ常緑針葉樹が顕著である様子は見えません。植生のことだとすれば時代を遡る必要があり、光や空気や風といった自然との関係のことだとすれば現地を見ることが必要です。

春の時期に訪れて見ましたが、確かに、そう多くはない杉などの常緑針葉樹の森は、新緑との対比が明確で不気味に黒く感じられます。

ただし、このことは豊沢川流域全体にいえることで、「なめとこ山」にごく近い地点での様子を表現しているのではないと思われる。したがって、この記述は「なめとこ山」を特定するには重要ではないでしょう。

そして、④「山のなかごろに大きな洞穴ががらんとあいてある。そこから、淵沢川がいきなり三百尺ぐらゐの滝になってひのきやいたやのしげみの中をごとと落ちて来る」という記述のことです。ここで「山のなかごろ・・・」とある山とは、「なめとこ山」のことでしょうか、広い意味である「淵沢川流域の山」のことでしょうか。

ごく、素直に読めば前者になります。②との関連で言えば、淵沢川の本流である現地形図の西ノ股沢あるいは桂沢のことになります。このとき、西ノ股沢の上流となると、滝や洞くつが存在する様子は地形図からは見えません。

桂沢のことなら大空滝があり、地形図からは洞くつも予想できる「崖」記号があります。そうすると「なめとこ山」は、標高 901m の「A」の峰となりますが、次の⑤のキーワードには「大空滝」のことが改めて出てきます。ここで「滝」とは、明らかに区別して使用していますから、「A」の峰と決めつけるには無理があります。

⑤番目のことです。「中山街道（のある地点から）を三里ほど行くと風が頂を通るような音がして、滝（白い細長いもの）があるのが分かり、それがなめとこ山の大空滝だ（原文を修正）」と書いています。

たしかに、「鉛」から中山街道を三里（12km）ほど行くと大空滝に達します。「それがなめとこ山の大空滝だ」とは、どのようなことでしょうか。「なめとこ山の大空滝だ」を短絡的に解釈すれば、大空滝の上流にある標高901mの「A」の峰や、これと連なる912.9mの三角点のある「B」峰を含めた山体が、「なめとこ山」だということになりますが、「なめとこ山」が独立峰あるいはそれに近い山だとすることでいいのでしょうか。

④のことで併せて考えて、「なめとこ山」はもう少し広い「この流域一帯の山体や森のこと」、山塊であって、その山塊にある「大空滝だ」と言っているのだとも言えます。

しかし、「なめとこ山」と「淵沢川」を広域の地名とすれば、多くのことが解決してしまうのは当然のことであり、お話の上のこととしても、少々無理があります。

残ったキーワード、⑦「・・・たくましい黄いろな犬をつれてなめとこ山からしどけ沢から三つ又からサッカイの山からマミ穴森から白沢からまるで縦横にあるいた」、このことも、③の「青黒いなまこや海坊主のやうな山」と同様に「なめとこ山」を特定するには重要ではないように思われます。しかし、全体を読むための重要なことが隠されていて、全く無関係ということでもありません。

主人公の小十郎が、狩のために歩いた地域を表現するために「なめとこ山」「しどけ沢」「三つ又」「サッカイの山」「マミ穴森」「白沢」という地名を登場させています。ここで、実在している

のは「鉛」に近い「白沢」だけです。

そして、地形図で見る限りの特徴的な「三つ又」状の地形は、2箇所見えます。西ノ股川、中ノ股川、大楠沢の合流点D、あるいは豊沢川本流、桂沢の合出とやや離れた出羽沢合出を含めた合流点Eですが、特徴的な三つ又は、D地点でしょう。

ここで、「三つ又」は合流点D、「白沢」は現在呼ばれている谷だと仮定します。そして、山名と沢川名は、何らかの順を追って記述されていて、それぞれ同レベル規模を持つものであると考えることにします。

そうだとすると、「白沢」が「鉛」に最も近い淵沢川の支流であることから、この記述は上流から順に並んでいるものと予想されます。明らかになっている「鉛」から「白沢」「マミ穴森」「サッカイの山」「三つ又」「しどけ沢」「なめとこ山」の順に地図と対比しながら見てみましょう。

「白沢」の次は「マミ穴森」ですが、これは実在する松倉山（967.8m）と毒ヶ森山（919.2m）が候補になります。末尾の「森」のこと、「白沢」からの隔たりのことから、毒ヶ森山（919.2m）がモデルと言えそうですが、それは後で振り返って見ましょう。

次いで、上流に向かって「サッカイの山」があって、「三つ又」となります。「白沢」から「三つ又」までの距離と全体のバランスから言うと、現毒ヶ森山（919.2m）が「マミ穴森」となり、現小倉山（850.7m）か、標高901mの「A」の峰が「サッカイの山」の候補となり、合流点Dを「三つ又」とするのが順当なところです。そうすると、西ノ股沢が「しどけ沢」となって、現ナメトコ山へとつながるでしょう。

これだけなら、現「ナメトコ山」と文中の「なめとこ山」と一致して、めでたしめでたしとなるのですが、④の「山のなかごろに大きな洞穴が・・・そこから、淵沢川がいきなり三百尺

ぐらゐの滝になって」や、⑤の「それがなめとこ山の大空滝だ」といった記述との矛盾を解決できません。困りました。

やはり、何らかの創作を含んでいるのでしょうか。

少々無理があるのかもしれませんが、「なめとこ山」を「この流域一帯の山体や森のこと」と捉えればどうでしょうか。そうすると、ここでの「山のなかごろ・・・」にある洞穴や滝のことは、淵沢川周辺のどこかに、大きな洞穴がある山があって、その山を源とする流れは滝から始まっているということになります。だとすれば、中山峠から尾根を南東へ3から4kmほどのところには、毒ヶ森山（919.2m）と松倉山（967.8m）があって、その周辺には洞窟ならいくらかでも発見できそうな崖記号があります。そして、松倉山（967.8m）近くには出羽沢（淵沢川の支流）があり、この流れは岩肌を走るように流れているといえます。毒ヶ森山の下には名もない滝が記されていますから、この記述にそった風景が予想できます。しかし、②の「淵沢川はなめとこ山から出て来る」の記述とは矛盾しますが、淵沢川のこと、なめとこ山と同様に、この流域一体の名称と捉えることで解決します。

結論として、『なめとこ山』は、実在するあるいは言い伝えられた『ナメトコ山』をモデルにしたもの。位置としては、現小倉山（850.7m）から、標高901mの『Aの峰』を経て現『ナメトコ山』までの山塊をいう。『なめとこ山（山塊）』の中山峠寄りには、実在する大空滝があり、淵沢川の源流となる西ノ股川には、現毒ヶ森山（919.2m）からの洞穴と滝がある借り物の風景が含まれている」と、することはどうでしょうか。

そのとき、毒ヶ森山（919.2m）が「マミ穴森」であって、現小倉山（850.7m）が「サッカイの山」となり、合流点Dが「三つ又」、西ノ股沢が「しどけ沢」となり、ナメトコ山塊へとつながるので

しょう。

それなりにこじつけてみましたが、賢治の思いは果たしてそのようなことだったのでしょうか。

いいえそうではないでしょう。「青黒いなまこや海坊主のやうな山々に囲まれた『なめとこ山』」は、あくまでも心の中にあるべき山だったのです。

#### 【参考文献】

「なめとこ山のくま」金子民雄著 「地図の友」昭和48年10月号

「宮沢賢治全集」宮沢賢治著 筑摩書房

「賢治地理」小沢敏郎編 学芸書林ほか